

## 日光 描かれたご威光 東照宮のまつりと将軍の社参 (平成21年度筑波大学附属図書館特別展図録)

著者	筑波大学附属図書館
内容記述	会期 平成21年10月5日(月)～10月30日(金) 会場 筑波大学附属図書館(中央図書館 貴重書展示室)
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00138464">http://hdl.handle.net/2241/00138464</a>



日光 描かれたご威光  
東照宮のまつりと将軍の社参

平成 21 年度 筑波大学附属図書館特別展

# 目次



ご挨拶（附属図書館長）  
ご挨拶（歴史・人類学専攻長）

2 3

將軍の日光社参と描かれたご威光 山澤 学

4

將軍家慶 日光社参の道

8

I 近世日光山と東照宮の莊嚴

9

II 日光参詣の諸相

14

III 將軍家慶の日光社参

17

筑波大学附属図書館所蔵の絵図 篠塚 富士男

30

## 掲載図版一覧

表紙・裏表紙

『日光山志』巻五 陽明御門御天井昇降二竜図（狩野探幽原画の模写）

（図版41書誌参照）

カット

『日光山御祭礼絵図』（図版11書誌参照）

『日光御内陣』（徳川十六神将図、明治期） 個人蔵

『日光御山中常行堂・法華堂勤番絵図』（図版38書誌参照）

## 凡例

- 一、本書は筑波大学附属図書館平成21年度特別展「日光描かれたご威光―東照宮のまつりと將軍の社参―」（会期平成21年10月5日（月）～10月30日（金））の図録である。
- 一、本図録に掲載されている史料は、特に記載のない限り筑波大学附属図書館が所蔵する。
- 一、掲載史料の表題には、表紙・包紙等にある外題を主に採用した。
- 一、図版には図版番号、史料表題、また、判明する場合には著者・作成者および年代、数量（一冊・一鋪は省略）を順に付した。これらに用いる漢字について、本字・正字は原則として現在通用の書体に改めた。法量・請求記号・電子化状況については、巻末の掲載図版一覧にまとめた。
- 一、展示史料の番号は本書の図版番号と一致するが、展示の順序は必ずしも番号順ではない。また、掲載した史料の一部は会場の都合により展示していない。展示史料の一覧は、本書に未掲載の記事とあわせて本特別展ホームページ（URL: <http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/exhibition/>）にアップロードするので、参照されたい。
- 一、会期中、10月11日（日）13時30分より中央図書館集会所において特別講演会「日光 描かれたご威光」（講師 大学院人文社会科学研究所講師・山澤学）を開催する。これは、展示とともに本学学園祭「雙峰祭」における研究公開の一環でもある。
- 一、掲載・展示史料の一部には差別的身分呼称が用いられている。過去に歴史的に存在した差別の事実は、現代社会における人身上の差別を許さず、根絶するためにも、決して隠蔽されてはならない。歴史によって差別の事実とその不当性を明らかにする教育・研究上の配慮から、それらはあえて削除していない。見学者・閲覧者の皆さまにおかれましては、人権擁護、差別根絶の意識をもってご利用いただくことを切にお願い申し上げます。
- 一、本編・図版解説は山澤学が執筆した。その他は記名の通りである。

平成二十一年度 筑波大学附属図書館特別展

# 日光 描かれたご威光

— 東照宮のまつりと将軍の社参 —

会期 平成21年10月5日(月) ～ 10月30日(金)

会場 筑波大学附属図書館 (中央図書館貴重書展示室)

共催 筑波大学附属図書館

筑波大学大学院人文社会科学部研究科歴史・人類学専攻

## ご挨拶

平成七年度以来恒例となっている筑波大学附属図書館特別展の図録をお届けします。平成一八年度からは学内組織との共催での展示会を特別展、附属図書館単独主催の展示会を企画展と呼び分けることとしていますが、今回は大学院人文社会科学研究所歴史・人類学専攻との共催による特別展です。昨年度から三か年計画で進めている中央図書館の耐震改修工事のため、残念ながら昨年は展示会開催を見送りましたが、今年は旧に復することができました。本特別展を企画した附属図書館研究開発室と、資料提供および展示構成等につきご指導いただいた山澤学先生並びに共催組織の人文社会科学研究所歴史・人類学専攻に感謝いたします。

さて、今回のテーマは「日光 描かれたご威光―東照宮のまつりと將軍の社参―」です。ご承知のように日光社参は將軍・幕府の威光を示すべく、時の將軍自らが多くの大名・家臣を伴って東照宮に詣でる大行事です。「なぜ、筑波大学で日光か」とお思いのことと想像しますが、附属図書館には前身校以来、永々と築かれてきた膨大な資料群が継承されています。その中の一つが今回の中心的資料である「日光御参詣誓固絵図」です。まずは、これらを収集し長期にわたり安定的に保存すると共に、研究資料として活用してこられた本学の先輩諸氏に敬意を表したいと思います。そしてこれらの資料について、今再び新たな視点から研究がなされ、その成果が資料として図書館に収蔵される、こうした収集、保存、活用による知識再生産の循環の営みが図書館の存在意義の大きな部分であるといえます。

本図録の三〇頁にも記したように、附属図書館では収蔵する古地図・絵図について計画的にデジタル化して公開してきています。本特別展に出品した多くの絵図は常時、高精細画像による電子展示でもご覧頂けますが、描き出された徳川將軍の威光を実物のみがつ迫力でご堪能ください。特別展を大いにお楽しみいただき、筑波大学の有する伝統、研究領域の幅広さと奥行きの深さ、そして人材の豊富さを実感していただければ幸いです。

なお、本特別展の会期の後半（一〇月一九日から一〇月三〇日まで）には、人文社会科学研究所との共催によるもう一つの特別展「筑波大学附属図書館所蔵連歌俳諧貴重書展」を同時開催します。同時期に二つの特別展を開催するのは附属図書館として初めての試みですが、どうぞ、あわせてご覧ください。

収蔵資料に一層の幅と深みをもたせることは図書館の責務であることから、今後とも資料の充実に努める所存です。しかし、入手機会や資金の制約があることも事実です。そこでこの場を借りて、教員や名誉教授、卒業生・留学生を含めた関係者に対し、図書寄贈のお願いを申し上げます。図書館の機能強化のために各位のご理解とご支援をお願いする次第です。

平成二十年十月

筑波大学附属図書館長 植松 貞夫

## ご挨拶

このたび附属図書館との共催により、特別展「日光 描かれたご威光―東照宮のまつりと将軍の社参―」を開催することになりました。特別展の共催としては、平成一四年度の「学問の神をささえた人びと―北野天満宮の文書と記録―」以来、二度目となります。

当専攻は歴史学（日本史学、東洋史学、西洋史学、歴史地理学）と人類学（先史学・考古学、民俗学・文化人類学）、複合分野（現代東アジア歴史・民俗研究、地中海・西アジア研究）から成る専攻で、基礎的な専門領域の深化を軸としつつ、応用・学際的な関連領域への展望をも拓きうる研究者を養成、輩出してまいりました。

皆さまご承知のとおり、附属図書館には、前身校の時代から収集されてきた歴史的に貴重な文献・資料類が数多く所蔵されております。当専攻では、歴史・人類学系の設置以降、附属図書館と協力しながら、それらの整理および研究、公開を進め、また、大学院・学群教育にも活用してきました。資料の公開方法が紙媒体から電子媒体へと変わりつつある昨今、附属図書館では新たなデータベースを構築する試みもなされておりますが、その際にも、基礎的な研究は欠くことはできず、私どもの果たすべき役割は変わっておりません。と同時に、データベースの構築を通じ、新たな発見がなされることも少なくありません。

今回の特別展は、このような新しい試みのなかで史料的价值が再発見された「日光御参詣警固絵図」を中心に、近年は世界遺産として注目を集める日光に係る附属図書館所蔵史料を展示・公開し、学界はもとより、地域の皆さまにご紹介するものです。点数としてはわずかではありますが、本学の伝統を感じさせる歴史史料の数々に触れていただくとともに、当専攻における日ごろの研究成果の一部をご高覧たまわれれば幸いです。

最後になりましたが、当特別展の開催にあたり、ご協力、ご支援をいただきました学内、学外の皆さまに厚くお礼申し上げます。

平成二十二年十月

筑波大学 大学院人文社会科学部研究科

歴史・人類学専攻長 古家 信平

# 將軍の日光社参と描かれたご威光

山澤 学

## 本特別展開催の経緯と主旨

今回、筑波大学大学院人文社会科学研究所歴史・人類学専攻および筑波大学附属図書館は、平成二十一年度（二〇〇九）特別展「日光描かれたご威光―將軍の日光社参と東照宮のまつり―」を開催することになった。

筆者の所属する大学院人文社会科学研究所歴史・人類学専攻は、これまで当図書館所蔵史料の調査・研究および公開に際して積極的に関与してきた。本特別展を開催する直接の契機となったのは、独立行政法人日本学術振興会平成一七年度（二〇〇五）科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付を受けた「近世絵図の書誌情報及び画像情報データベース」の作成であり、その成果は、絵図史料以外の膨大な文献史料についても再検討を要請することになった。なかんずく近世日光山史を専門とする筆者は、データベースの構築により原態の確認が容易となった「日光御参詣警固絵図」一八舗の一群（表1、図版21～38）に関心があり、これらの研究と公開を進め、本特別展の企画・構想に取り組むことになった。

当図書館に所蔵される手描きの絵図については実際の用務に基づき作成されたものが少なくなく、とくに警固を主題とした近世（江戸時代）の絵図は旧大名・旗本・御家人等から流出したことを類推させる書人（かきいれ）が見受けられる。いうまでもなく、これらを用いて近世社会のあり方を考察することが可能である。

本特別展では、「日光御参詣警固絵図」が作成された天保一四年（一八四三）四月、二代將軍徳川家慶による日光社参（しんさん）にかかる絵図を作成させた、近世日光山・東照宮をめぐる発現される徳川將軍の存立をささえた権威の位相を明らかにし、近世社会のあり

方に迫っていきたい。小稿はその概要を述べるもので（詳細は別稿を準備中）、本特別展を理解する一助となれば幸いである。

## 一 徳川將軍の日光社参と道中

日光山は、奈良・平安時代以降、勝道上人の開山縁起に見られるように、男体山を中心とした山岳信仰の道場として、さらに平安末から鎌倉時代以降には関東天台宗、日光修験道の聖地として発展した。それらの宗教者が拠点とした山内地区は大谷川・稻荷川の合流点にあたり、恒例山の周囲には数多くの堂社が建立された。とはいえ、大きく発展したのは近世、徳川家初代將軍家康が東照大権現として勧請（かんじよう）された元和三年（一六一七）以降のことである。

その前年、元和二年四月一七日に没した徳川家康の遺骸は、その遺言により駿河久能山（静岡県）に遷され、松平家累代の菩提寺である三河岡崎（愛知県）の大樹寺に位牌が建てられ、葬儀は江戸芝（東京都）に徳川家菩提寺として建てられた三縁山増上寺で執り行われた。さらに、一周忌に日光へ「小キ堂」を建てて勧請せよ、との遺志を根拠に、日光山に一社が建立され、久能山からその神柩（しんきゆう）が遷される。これにより近世日光山は、東照宮の祭祀を担う場、組織として展開する道へと歩むことになった。

三代將軍家光の時代には、將軍の主導により、その願文（がんもん）（参考1）にみられる「莊嚴」という語に象徴されるように祭祀が強化された。社殿の大造替（ぞうたい）（建替）も実施され、ついに正保二年（一六四五）には後光明天皇より宮号宣下（きゅうこうせんげ）を獲得し、祭祀組織の頂点に宮門跡（みやもんせき）（後の輪王寺宮）を迎えることになる。天皇の宗教的権能により保証されつつ、日光東照宮と近世日光山は確立される（本編1）。家光もまた、

表1 筑波大学附属図書館所蔵「日光御参詣警固絵図」

図版番号	絵図表題
21	足並上覧之節控所絵図面
22	日光御参詣足並御行列上覧之節御供方控所建場・開場絵図
(消失)	(日光御参詣江戸御目見・御供開場所絵図)
25	御成之節岩渕・川口仮橋勤番絵図
23	日光御参詣岩槻御目見・御供開場所絵図
27	御成之節房川船橋勤番絵図
(消失)	(日光御参詣古河御目見・御供開場所絵図)
29	御成之節喜沢村御固絵図
24	日光御参詣宇都宮御目見・御供開場所絵図
31	宇都宮方壹之山伐透し山道守護絵図
32	宇都宮方貳之山伐透し山道守護絵図
33	宇都宮方三之山伐透し山道守護絵図
34	宇都宮方四之山伐透し山道守護絵図
36	日光神橋勤番絵図
35	日光御山中五重塔下勤番絵図
38	日光御山中常行堂・法華堂勤番絵図
37	日光御山中大師廟勤番絵図
30	還御之節喜沢村御固絵図
28	還御之節房川船橋勤番絵図
26	還御之節岩渕・川口仮橋勤番絵図

註 時系列にそって配列した。

最古の印記はいずれも「東京師範学校図書印」。

消失した絵図2舗の表題は東京高等師範学校編『東京高等師範学校図書館和漢書書名目録（大正元年12月現在）』（1915年）による。

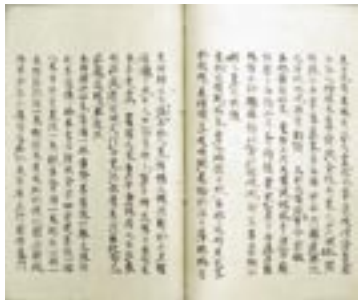
表2 徳川将軍の日光社参

年 代	将軍	備 考
元和3年(1617)4月12日～22日	秀忠	第3回御神忌、東照社遷宮
5年(1619)10月13日～20日	秀忠●	
8年(1622)4月12日～20日	秀忠	第7回御神忌
9年(1623)4月13日～22日	家光＊●	
寛永2年(1625)4月	家光▲	将軍就任報告、眼病のため延期
7月13日～20日	家光	将軍就任報告
5年(1628)4月13日～21日	秀忠※	第13回御神忌
4月22日～5月1日	家光	第13回御神忌
6年(1629)4月13日～21日	家光	痘瘡快癒の立願
9年(1632)4月13日～21日	家光	第17回御神忌、秀忠服喪のため今市宿泊
11年(1634)9月13日～20日	家光	上洛報告
13年(1636)4月13日～22日	家光	第21回御神忌、本社造替
17年(1640)4月13日～23日	家光	第25回御神忌
19年(1642)4月13日～22日	家光	第27回御神忌、奥院造替
慶安元年(1648)4月13日～23日	家光	第33回御神忌、宮号宣下後初
2年(1649)4月10日～23日	家綱＊	
万治3年(1660)4月	家綱▲	
寛文3年(1663)4月13日～24日	家綱	大猷院第13回忌
7年(1667)4月	家綱▲	大猷院第17回忌
天和3年(1683)4月	綱吉▲	大猷院第33回忌
元禄10年(1697)4月	綱吉▲	
正徳5年(1715)4月	家宣▲	第100回御神忌、将軍急逝
享保13年(1728)4月13日～21日	吉宗	
安永元年(1772)4月	家治▲	
5年(1776)4月13日～21日	家治	
文政8年(1825)4月	家斉▲	
9年(1826)4月	家斉▲	
天保14年(1843)4月13日～21日	家慶	

註 『徳川実紀』『続徳川実紀』（国史大系）および根岸 2007 により作成。

大御所（※）および将軍世嗣（＊）も将軍に準ずるものとした。

▲は延期または中止，●は実施が確認できない社参。



参考1 日光山御神事記

徳川家光願文の冒頭部。  
(請求記号 ハ240-69)

慶安四年（一六五一）四月二〇日に没すると山内の大黒山に葬られ、廟所である大猷院が建立される。

東照宮・大猷院で執行される例祭には、通常は将軍の名代が参詣した。しかし、家康・家光の年忌や、将軍・幕府の威光を示すべき幕政の転換期には将軍自らが参詣した。これを日光社参と呼ぶ。日光社参は、世嗣（跡継ぎ）時代も含め、二代秀忠から一二代家慶まで計一七回が実施されたが、頻度は年忌法会にあわせて実施されることが多かった近世前期の方が高い（表2）。とくに家光の場合は、歴代最多の九回も実施した。家光の代には、社参時の宿泊用に将軍家の御殿が各地に建造され、以後、天和元年（一六八一）ごろまで維持された。社参の規模は幕藩制国家にふさわしく大きなもので、行列の先頭が日光に到着しても、最後尾はまだ江戸城内で出発を待っている、などという俗説もあった。

日光社参の大規模化は、日光への街道も整備させた。五街道の一

つに位置づけられる日光道中（日光街道）、武蔵国岩淵・岩槻（埼玉県）を経由する日光御成道（日光御成街道）、下野国（栃木県）で日光道中を喜沢村から分岐して壬生・鹿沼を経由して今市に至る壬生通は、将軍の参詣路として整備が進んだ（八頁参照）。

街道には宿場町が設定され、各宿には伝馬、すなわち公用の継立をする建人馬が常備され、また、問屋・年寄・帳付・馬指などの宿役人が置かれた。日光道中の宿場町に伝馬が定められたのは、通説では寛永年間（一六二四～四四）末年から正保年間（一六四四～四八）のころとされ、その終点鉢石宿では正保元年のこととされている。かかる整備は、宮号宣下、および天皇・朝廷が東照宮例祭に派遣する例幣使の下向の準備が契機となったと考えられよう。御成道・壬生通も、脇往還でありながら五街道に準じて幕府道中奉行（万治二年（一六五九）設置）により所管された。交通量が増大すると、特定の村から宿場町に人馬を提供する定助郷も設けられた。





参考2 日光御宮御参詣供奉役人附

天保14年4月に葛屋重三郎ほかの再版。  
(個人蔵)

## 二 天保一四年の日光御参詣

武家が日光社参で將軍に供奉(お供)することは軍役とされた。社参は將軍の武威を示す軍事的行動かつデモンストレーションでもあった。天保一四年に実施された將軍家慶による最後の社参(史料では日光御参詣と記される)もその例にもれない。百姓・町人にも臨時の夫役である社参役が賦課された。

家慶は江戸城出立の前に供奉者の足並上覧(予行練習の見学)を行う。宿泊する宿城である岩槻・古河(茨城県)・宇都宮(栃木県)では、將軍と城主あるいは供奉者との間に主従関係を確認する儀礼が、あたかも江戸城内であるかのように行われる。道中において、水呑場や昼休所・小休所は身分により場所が異なる。日光山内でも、供奉する大名・旗本は院・坊の屋敷があてがわれるが、その家来は門前町の町屋に下宿を割り振られる。また、日光山の領知である日光神領に暮らす奇特の者や老年の者を將軍が褒賞する。さまざまな場面で、將軍を頂点とする身分制と主従・支配の関係が視覚的に表現され、將軍・幕府の威光が発揮された。

この社参を計画したのは老中水野忠邦である。それまでよりも小規模とはいえ、一四、五万人の武家に供奉を命じた。天保改革を推進する水野は、上知・印旛沼干拓・御料所改革など、大名をも巻き込む重要な政治課題を遂行するのに先だち、くもりなき聖代を演出し、自ら幕府の政治的力量を誇示したのである。

## 三 描かれた將軍・幕府の威光

日光社参に際しては、多様な記録・絵図が作成された。例えば、社参の役割に応じて行動に必要な達・触書の御用留・日記、法会記録、行動計画を図示する絵図など実務にかかわるもの(図版1・6・7・9・20・40・44・46)、供奉者による文芸・絵画作品(図版10・43)、さらには供奉者や社参を紹介する出版物である道中絵図・日光山絵図・略武鑑(図版8・参考2)である。

日光社参は、絵図・略武鑑の出版に見られるように、見物の対象でもあった。例えば、家慶の社参に供奉した旗本尾島主殿頭が記した「日光御参詣記」(図版20)巻二には、天保一四年二月に大目付・目付へ宛てた水野の達が見える。ここには、お供の面々で東照宮の祭礼を拝見したい者は拝見しても苦しくない、とある。町人・百姓も同様で、道中での將軍・武家の通行も、東照宮の例祭で行われる御旅所への神輿渡御(図版11)も見物することは許されていた。

東照宮例祭を取り上げる紀行文「日光山詣の記」(図版12)には、神輿渡御の先払いをする「榊」(御祓榊)の「枝も葉も折て拝見の貴賤に投つかわす」とあり、その枝葉は護符(お守り)とされた。近世日光山は庶民参詣の対象でもあり、天保一一年(一八四〇)九月二五日からの一年間で三万五〇四二人もの参詣があった(本編II)。將軍社参の見物もその延長線上にあった。

「日光御参詣警固絵図」は、將軍家慶を警固した百人組の配置・進行の予定を図示する(本編III)。その百人組同心の団には、滝沢馬琴(興邦)の嫡孫である太郎もいる。祖父が書画・古書を売って工面してくれた十匁筒の鉄炮を携えての晴れ姿であった。

ここにも將軍の威光を発揮する場が描かれている。ふだんは江戸への不審者の出入を監視するために橋が架けられていない荒川・利根川にかけられた巨大な仮橋と船橋。各地に用意された將軍専用の休憩施設のたすまい。百人組が警固するなかを將軍が威風堂々と通行する道中の景観。そして百人組の組頭が將軍に御目見する場。これらは、いずれも見物人への見せ場でもあった。

とくに百人組が警固し、組頭が將軍に御目見する場は興味深い。例えば「日光神橋勤番絵図」(図版36・参考3)では、警固の立ち位置を組頭は■(朱)、与力は●(朱)、同心組頭は▲(黒)、同心は●(黒)で示す。神橋御番所の前が組頭の御目見場所であり、そこには弓、鑓、赤い袋入りの鉄炮などの武具、捕り物用の三つ道具がすえられ、また○(朱)は三つ葉葵の紋付き提灯、△(朱)は組頭



参考3 日光神橋勤番絵図  
神橋御番所前の御目見所。  
(図版36参照)

の家紋付きの高張提灯、○（黒）は木行灯が置かれる。これらはただ置かれたのではない。百人組が警固する象徴として飾られているのである。

將軍が通行する町場では、その住人が白砂をまき、<sup>ほうき</sup>箒や<sup>ておけ</sup>手桶を飾ることが命じられた。それらは將軍の威光を示すためであったと指摘されている。將軍家慶の日光社参でも同様であった(図版44)。この百人組の事例では、武具・捕り物道具がこれに相当する。供奉者それぞれが御目見の場では、その役職や立場にふさわしい道具をもつて、自らを象徴的に飾り立てたのである。

見物人は、これらの視覚的な象徴を通じ、百人組をはじめ数多の供奉者を率いる將軍・幕府の威光を感じとった。「日光御参詣警固絵図」は、かかる威光に支えられた近世社会のあり方をうかがわせる貴重な絵図といえるだろう。本特別展が契機となり、同絵図の類本との比較研究、あるいは関連する当図書館所蔵史料の発掘、研究がよりいっそう進展することに期待したい。

## 主要参考文献

- 阿部 昭一九九三「享保の日光社参における公儀御用の編成」『人文学会紀要』二六。  
阿部 昭編二〇〇二『日光道中と那須野ヶ原』吉川弘文館。  
泉 正人一九八二「天保期日光社参と宇都宮藩」『栃木県史研究』三三。  
伊藤寿和二〇〇〇「下野国の街道と宿場町に関する基礎的研究」『かぬま歴史と文化』五。  
大島延次郎一九五七『日本交通史論叢』続編 吉川弘文館。  
大友一雄二〇〇六「日光社参と身分」『国史学』一九〇。  
小山市立博物館編一九八六『日光街道と小山』。  
河内八郎一九七九「安永五年日光社参」『栃木県史研究』二六・一七。  
久留島浩一九八六「盛砂・時砂・飾り手桶・箒」『史学雑誌』九五―八。  
古河歴史博物館編一九九四『日光社参と古河藩』。  
国分寺町史編さん委員会編二〇一〇・二〇一一『日光社参関係史料』一・二。  
国立歴史民俗博物館編一九九四『描かれた祭礼』。  
児玉幸多一九八六『近世交通史の研究』筑摩書房。

埼玉県教育委員会編二〇〇七「日光道中・日光御成道」『歴史の道調査報告書集成』  
一四 海路書院。

曾根原理一九九六『徳川家康神格化への道』吉川弘文館。

曾根原理二〇〇五「徳川家康年忌行事にあらわれた神国意識」『日本史研究』五一〇。

曾根原理二〇〇八「神君家康の誕生」吉川弘文館。

曾根原理編二〇〇四『統神道大系』神社編東照宮 神道大系編纂会。

種村威史二〇〇六「天保期日光社参における宿城儀礼と奏者番」『国史学』一九〇。

津田良樹一九九五「街道の民家史研究」芙蓉書房出版。

暉峻康隆他編一九七三『馬琴日記』四 中央公論社。

栃木県教育委員会編二〇〇八『日光道中・日光道中千生通り・関宿通り多功道 栃木県歴史の道調査報告書一』。

の道調査報告書一。

栃木県立博物館編一九八四『日光参詣の道』。

栃木県立博物館編二〇〇五『とちぎの歴史街道』。

内藤正敏二〇〇七『江戸・主権のコスモロジー』法政大学出版局。

中島義一八九七九「徳川將軍家御殿の歴史地理的考察(第三報)」『駒沢地理』二五。

日光街道ルネサンス二一推進委員会編二〇〇三『栃木の日光街道』下野新聞社。

日光東照宮社務所編一九七八「天保社参史料」『社家御番所日記』二八。

根岸茂夫二〇〇七「江戸幕府の祭祀と東照宮」『神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成研究報告』二。

形成研究報告二。

深井甚三一九九四『幕藩制下陸上交通の研究』吉川弘文館。

深井雅海二〇〇八「天保の日光社参」『江戸時代の古文書を読む 天保の改革』東京堂出版。

福原敏男一九九九「祭祀の練物」『国立歴史民俗博物館研究報告』七七。

藤実久美子一九九九『武鑑出版と近世社会』東洋書林。

藤野 保二〇〇六『近世国家解体過程の研究』前・後編 吉川弘文館。

藤田 寛一九八九「天保の改革」吉川弘文館。

壬生町立歴史民俗資料館編一九九〇『日光社参の道』。

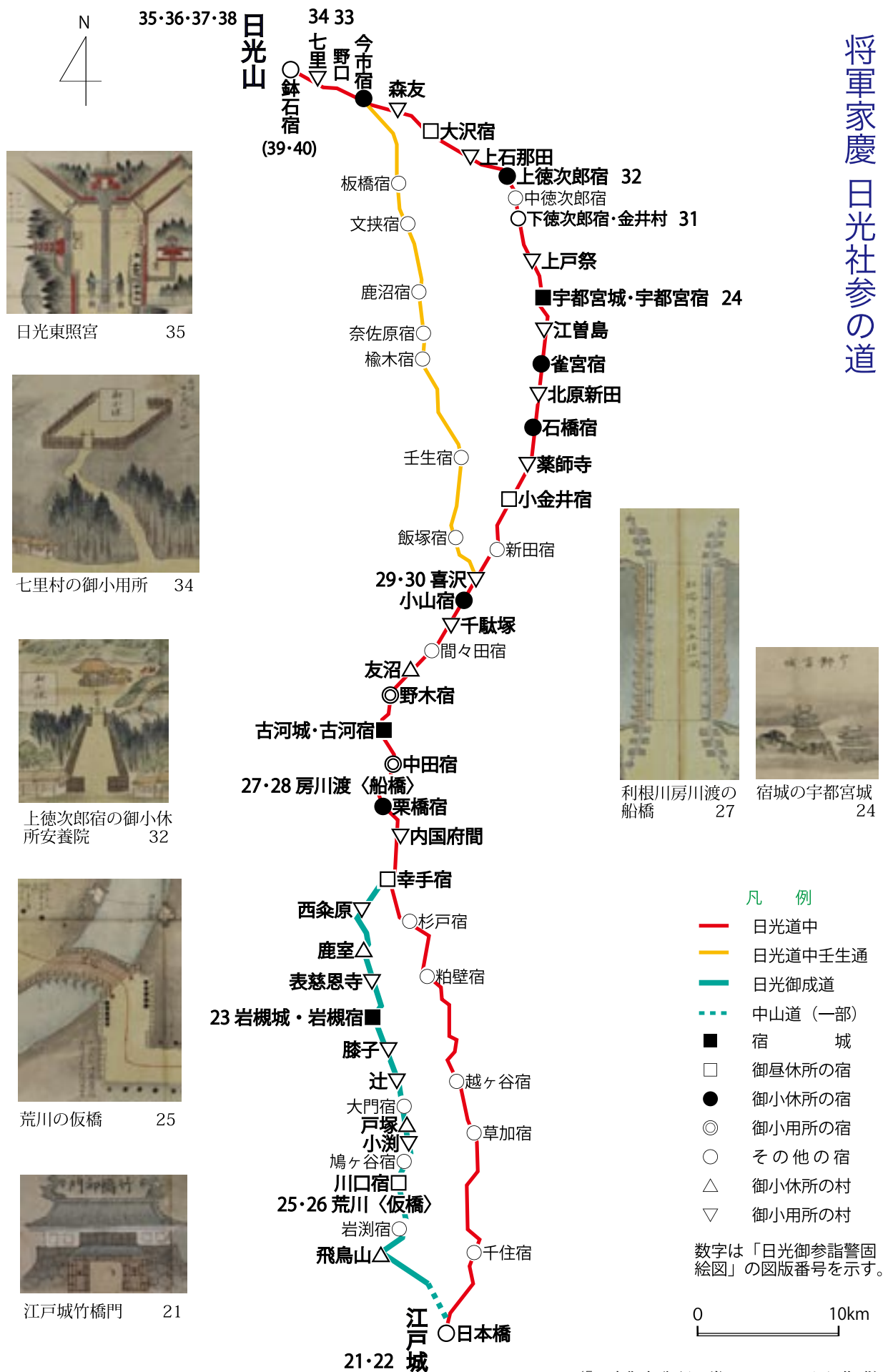
山口啓二一九八六「日光社参寄人馬についての一考察」『中世・近世の国家と社会』

東京大学出版会。

山澤 学二〇〇九『日光東照宮の成立』思文閣出版。

渡辺 浩一九九七『東アジアの王権と思想』東京大学出版会。

# 將軍家慶 日光社参の道



（「日光御参詣記」巻 13・14 により作成）



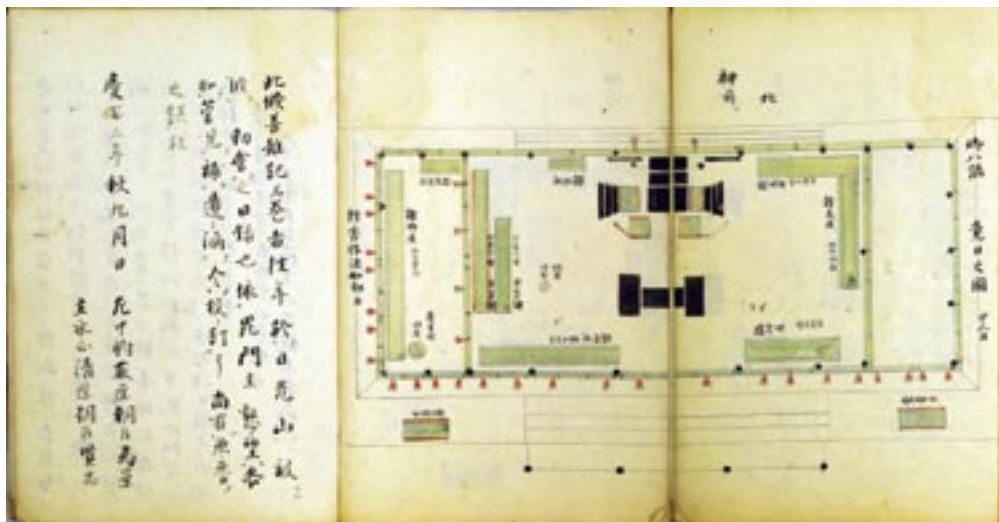


# I 近世日光山と 東照宮の荘厳

徳川家康の神格は、元和三年（一六一七）四月に日光山に遷座され、東照大権現の神号を後水尾天皇から授与されて神となる。その社は東照社と呼ばれる。日光山は、座主天海が主導して、その祭祀に必要な建築空間と祭祀・組織を整えていく。

幕藩制国家の確立を推進した三代將軍家光は、天皇・朝廷の宗教的権能に依拠することにより「莊嚴」、すなわち東照社の祭祀を強化し、將軍在職中には社参を九回も実施する。拜殿に將軍着座の間を設ける大造替を行い、徳川將軍家の正統性を証明する縁起も完成させる。さらには正保二年（一六四五）一月三日に東照大権現を皇祖神と同格とする宮号宣下、そして門跡（天皇家出身の座主）の擁立を実現する。

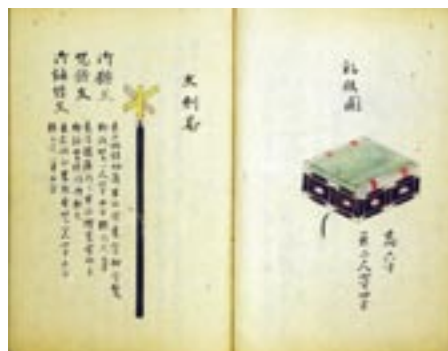
家光自身も死後、日光山内に葬られ、その靈廟大猷院が建立され、明暦元年（一六五五）には後水尾法皇から門跡に輪王寺の号が与えられ、幕府からはその組織・祭祀にかんする法度が発せられる。門跡輪王寺宮を祭祀組織の頂点にすえ、東照宮祭祀を根本におく近世日光山は、このようにして確立された。



## 1 日光山修善雜記 冷泉為景・伏原賢忠

慶安2年(1649)9月 3巻3冊

日光山では、家康・家光の年忌に法会が大々的に実施された。慶安元年(1648)の家康第33回御神忌では、宮号宣下後最初の日光社参が將軍家光により実施され、近世日光山創出の立役者天海に慈眼大師号が授与された。その法会は法華八講の執行を含む大規模なもので、法華八講着座の指図や種々の法具の仕様図も載る本史料はその記録の一つである。著者のうち冷泉為景は、朱子学者藤原惺窩の実子で、公家下冷泉家の当主。なお、当図書館所蔵本は、同年に謄写された天台座主良尚法親王による一本を祖本とする写本。



「東より  
照さん世々の日の光  
山をうごかぬ  
ためしにハして」

## 2 日光山志 植田孟縉 天保8年(1837)正月 5巻5冊（図版41解説参照）

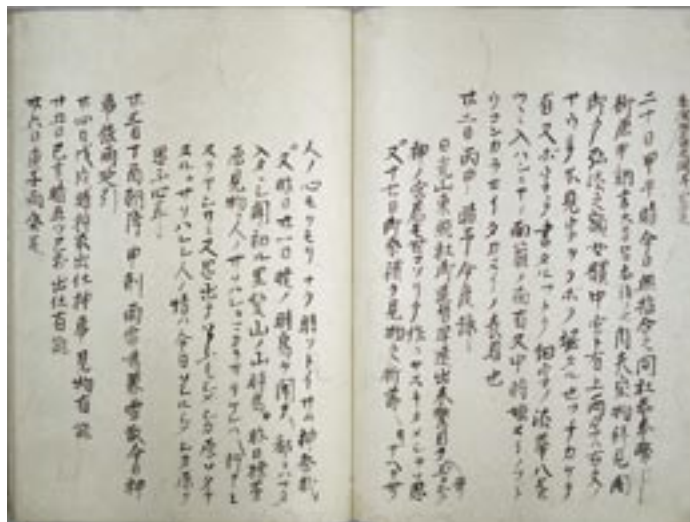
図版は巻5に引用する烏丸光広の元和3年の紀行文「御鎮座之記」所収の一首。東照社を礼讃する。

ひ の だいなごんすけかつきようき ひのすけかつ  
**3 日野大納言資勝卿記** 日野資勝

元和 2(1616) 正月～寛永 16 年 (1639) 5 月

6 巻 6 冊

日野資勝は、徳川将軍家に親しい公家である  
 武家昵懇衆の一人。東照社の元和 3 年遷宮や  
 寛永年間 (1624 ～ 44) の御神忌法会にも参向  
 した。図版は、寛永 13 年 4 月、家康の第 21  
 回御神忌法会出仕の箇所。東照社は、寛永大造  
 替により現存する権現造建築を中心社殿とする  
 大部分の建築が完成されていた。その 22 日条  
 には、17 日の祭礼を見物した所感を詠んだ「ナ  
 ヘテ世ノ 人ノ心モ クモリナク 時ソトイサ  
 ム 神祭哉」の一首が記されている。当図書館  
 所蔵本は、和学講談所旧蔵の写本。



とうしょうだいさんげんえんぎ  
**4 東照大権現縁起** 5 巻 1 冊

「東照大権現縁起」(仮名縁起, 5 巻本の絵巻物)  
 は、将軍家光に命じられた天海によって寛永 17 年  
 (1640) に完成、東照社に奉納された。寛永 13 年  
 に漢文体の「東照社縁起」(真名縁起)の上巻が編  
 まれていたが、これに続く 2 巻と仮名縁起は第 25  
 回御神忌にあわせて完成された。それらの清書は、  
 後水尾上皇と公家・門跡らにより行われ、徳川家が  
 将軍職を世襲する正統性と東照大権現の神格の尊さ  
 が説かれた。当図書館所蔵本は、寛文 6 年 (1666) 4  
 月に作成された仮名縁起の模本を底本とし、絵を省  
 略して筆写された写本である。図版はその巻末。



しょうとくにつこうれいへいし  
**5 正徳日光例幣使** 正徳 5 年 (1715) (原表題「御大礼書」。「享保将軍宣下」「寛政小金原 獵 令」と合冊)

徳川家康の神格化は正保 2 年 (1645) の宮号宣下により完成され、東照宮が成立した。以後、家康の命日であ  
 る 4 月 17 日の例祭 (4 月御祭礼) は天皇の御願による勅会となり、朝廷から例幣使 (天皇の勅により宣命の奏  
 上と金幣の奉幣を執り行う使者) が毎年発遣された。これは伊勢神宮と同格の扱いであった。本史料は正徳 5 年  
 4 月に執行された第 100 回御神忌法会の記録で、「緑川文庫」の蔵書印がある。図版は中御門天皇宣命の写、お  
 よび東照宮における奉幣時の指図。なお、このとき将軍家宣の社参が計画されていたが、自身の急逝により中止  
 された。





## 6 日光山図絵

将軍の日光社参が実施されるときには、警固の目的や知的関心に応じて日光山や日光道中に関する各種の絵図が作成された。そのため各種の日光山の絵図が、大名・旗本の家伝文書中に数多く見られる。将軍は東照宮(御宮)だけでなく、3代将軍家光廟である大猷院(御堂, または御霊屋)にも詣で、名勝である滝尾社, 寂光寺, 裏見の滝, 中禅寺などにもしばしば足をのぼした。本絵図も、社参時の警固に備えるために作成されたものと思われる。その推定が正しければ、稲荷川左岸に立地する享保14年(1729)に建立された律院(興雲律院), および日光の民政を担当した日光目代屋敷に山口忠兵衛(宝暦3年<1753>~安永8年<1779>在職の信香)の表記があることから、安永5年(1776)に10代将軍家治が実施した日光社参のころの景観を示す絵図である。



現在の日光市周辺。松平正綱が寄進し植林した日光杉並木が描かれている。



現在の茨城県古河市から埼玉県北葛飾郡栗橋町周辺。中央は利根川の房川渡。

## 7 日光御道中筋宿々里数

日光道中の絵図も警固などの実用や知的関心により数多く作成された。幕府道中奉行が作成した文化4年(1807)の『日光道中分間延絵図』(東京美術, 1986~88年)や天保14年(1843)の日光社参時に描かれた『日光道中絵図』(独立行政法人国立公文書館所蔵), その随行者であった狩野晴川院・薫川が描いた『日光御参詣地取図巻』(東京国立博物館所蔵)などに代表される, 絵画的な要素が濃い鳥瞰図が年代を下るにしたがい増加する。これに対して, 本絵図は描写が簡素な折本形式の道中絵図である。景観年代は, 記載される大名・代官名から判断すると, 元禄年間(1688~1704)ごろ。今市・上徳次郎・古山新田・乙女(以上, 栃木県)・栗橋・野田・大門(以上, 埼玉県)に「御茶屋場」, 大沢・小山(以上, 栃木県)・王子(東京都)の「元御殿場」(将軍家御殿の跡)3か所および幸手・川口(以上, 埼玉県)に「昼御休」, 宇都宮(栃木県)・古河(茨城県)・岩槻(埼玉県)に「御泊御殿場」が赤の四角型で表示される。すなわち, 日光社参における将軍の休憩・宿泊場所を示すために作成された絵図であろう。



## 8 供奉御役附 享保 12 年 (1727) 8 月



## 9 安永 中 日光道中里数書

日光社参を実施する際には、それ以前に実施された社参の先例が重んじられた。本史料は、安永 5 年 (1776) に実施した日光社参において、將軍家治が通行した日光道中沿道の宿場や村々の明細、將軍の宿泊・休憩場所、警固などの先例を調べたもの。図版は武蔵国 (埼玉県) 栗橋と下総国 (茨城県) 中田の境界を流れる利根川 (房川渡) の書上。ここには平常、江戸への不審者の出入りを防ぐために橋がかけられなかったが、社参時には船を並べた上に橋を渡す船橋が仮設された。その長さは 165 間 (約 297 メートル) とある。図版 27・28 も参照。



## 10 二荒山御供記 成島和鼎 安永 5 年 (1776) 5 月

安永 5 年の社参に随行した幕府奥儒者成島和鼎 (成淵) が著した紀行文で、「道芝の露」ともいう。日光山・日光道中のようにだけでなく、祭礼・儀式に関する叙述がくわしい。本文の翻刻は『日本紀行文集成』4 (日本図書センター, 2001 年) を参照。当図書館所蔵本は、奥書によれば、天保 15 年 (1844) 5 月、立野良道なる人物が江戸本郷の旅屋 (旅籠屋) で写した写本。なお、幕府の正史『徳川実紀』の編纂者として知られる奥儒者成島直は和鼎の孫で、天保 14 年の社参に随行した際に、『晃山扈從私記』(『江戸』6, 教文社, 1981 年) を著している。







さるひききんだゆう さるめん  
猿牽金太夫と猿面の子供。



へいしほこもち  
行列の先頭を行く兵士鉾持。



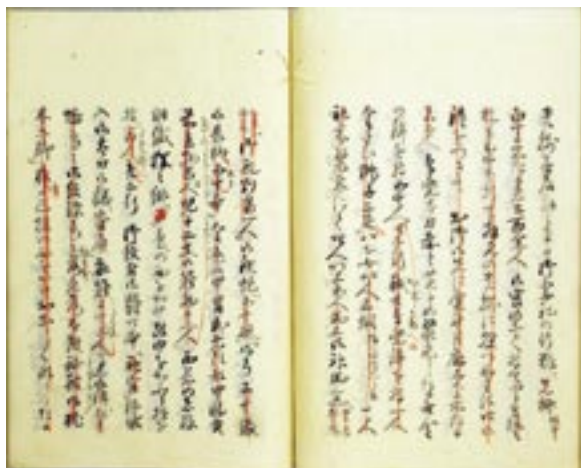
みこし きんべい ぶぎょう げち そう くみがしら  
東照大権現の神輿。前に金幣、祭礼奉行、下知僧、日光奉行支配の組頭・  
ぎんみやく どうしん だいせんどうぎょうしゃ やまぶし さと  
吟味役・同心などが進み、後には大千度行者・日光山伏・里山伏が続く。



おたびしよ ほんでん  
巻末に神輿が渡御した御旅所を描く。左端の本殿に神輿1基が納められる。  
はいでん さんぼんだてななじゅうござん ぐく  
中央の拝殿では三品立七十五膳と呼ばれる御供を備え、僧侶が神事を執行す  
る。その右端ではやおとめ  
がくじん あずまあそび  
本殿前庭では楽人が東遊を舞う。

## 11 日光山御祭礼絵図

東照宮9月御祭礼の神輿渡御の行列(いわゆる千人行列)を描く絵巻物で、軸装から折本に改められてい  
る。9月御祭礼は、臨時祭、臨時御祭礼とも呼ばれ、伊勢神宮で奉幣使を迎えて執行される神嘗祭と同じ9月  
17日に執行された。家康の命日4月17日に執行される4月御祭礼は、元和3年(1617)の駿河国久能山(静  
岡県静岡市)から日光山への遷宮を模し、祭神の生命を再生させる儀礼である。これに対して9月御祭礼は、  
さんとうごんげん またらじん にしよ  
山王権現・摩多羅神の二所の神輿を欠くなど、やや規模を小さくするもので、領有する土地を祭神が確認する  
しんこう  
神幸としての性格が強いといい、4月御祭礼に比べると現存するその絵巻物は少ない。両祭礼には、幕府から毎  
年、将軍の名代と祭礼奉行が派遣され、後者は東照大権現の神輿の前を進む。本史料には書入がまったくないが、  
巻頭に「正徳日光例幣使」(図版5)と同じ「緑川文庫」の蔵書印がある。



## 12 日光山詣の記 藤原正従 寛政7年(1795)

(「紅葉山御宮詣の記」「御転任の記」と合冊)

外題は「紅葉山之記」。年来東照宮の「神恵」を仰ぎた  
いと願っていた著者が「公」の許可を受け、4月14日に  
江戸を出立、4月御祭礼と日光山の名勝を拝見して帰宅す  
るまでを記す紀行文。本文を見る限り、著者は、将軍の名  
代や祭礼奉行ではないものの、幕臣のようである。武家も、  
しばしば東照宮祭礼を拝見し、将軍家の威光を仰いだ。図  
版は神輿渡御を記す箇所。神輿渡御に先立ち、御旅所から  
渡御の道を清めて歩く御迎櫛の枝葉を拝見する人々がその  
枝葉を護符として授かることを記録する。第3者が何ら  
かの編纂物に加えるため朱墨により校訂した跡がある。





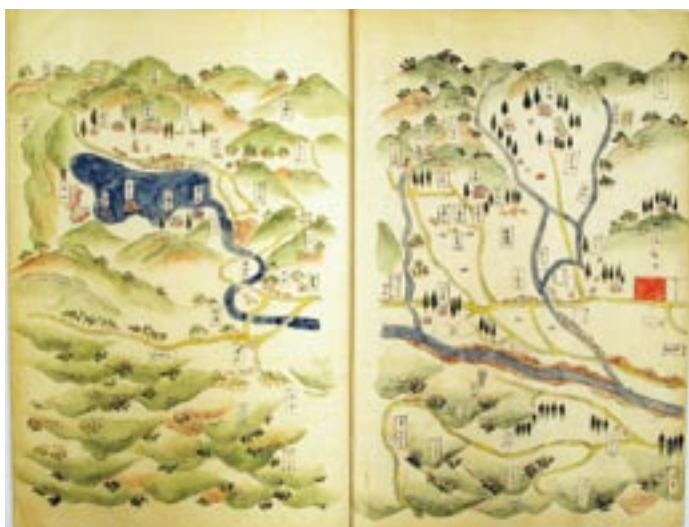
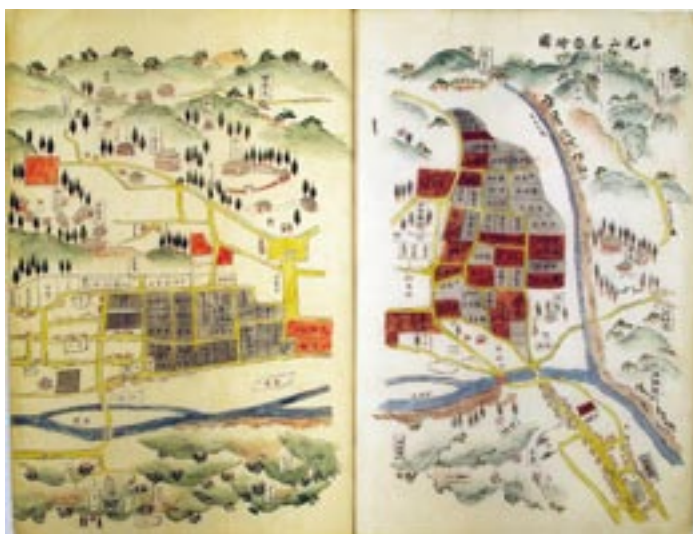
## II

# 日光参詣の諸相

日光山は、古代以来、山岳霊場、関東天台宗の拠点、さらには修験道の行場として存在した。日光東照宮が成立し、近世を迎えると、百姓・町人の自立、経済の発展を背景に、関東地方における寺社参詣の場として、いつそうの発展期を迎えた。

元禄年間（一六八八～一七〇四）になると、紀行文や案内記が数多く記されるようになり、また、史跡の考証も進められた。多くの出版物に日光の名が散見されるようになる。

俳聖松尾芭蕉もまた、元禄二年（一六八九）四月、『奥の細道』の旅に際して東照宮に詣で、その自然と人工美を礼讃したことは著名である。とはいえ、東照宮は公には私幣禁断、すなわち個人の崇拜を禁じられた場であった。芭蕉は、「御山に詣拝す。往昔、此御山を二荒山と書きしを、空海大師開基の時、日光と改め給ふ。千歳未来をさとり給ふにや、今此御光一天にかゞやきて、恩沢八荒にあふれ、四民安堵の栖穩なり」と考証しつつも、「猶憚多くて筆をさし置ぬ」と擱筆した。



「芭蕉翁奥の細道に、此御山を二荒山と書くを、空海大師日光と改給ふとぞ。  
あらとくと 青葉若葉の 日の光り」

13 日光御社参図誌 竹村立義 文政元年(1818)9月 5巻3冊

「日光巡拝図誌」の謄写本。竹村は江戸の裁縫師で、独笑庵、長喬ともいう。詩歌に秀で、また、関東各地の霊山・名跡の紀行文を数多く編んだ。本書は文化15年(1818)の東照宮4月御祭礼見物を目的とした参詣を題材とするが、『奥の細道』など多くの文献も考証して引用する。東照宮祭礼については、神輿を担ぐ白張姿の町人が見物人の投げ入れたお捻りを拾おうとする様子も記す。図版は、巻上(巻2)から、巻頭の「日光山略絵図」と『奥の細道』引用箇所。高崎寿編『日光巡拝図誌』(ぎょうせい、1988年)に別本を底本とした翻刻がある。



15 日光名勝記 貝原益軒

正徳4年(1714)3月

益軒が京都の書肆 柳枝軒(茨木多左衛門)の求めにより著した、日光参詣のための初の案内記。江戸からの道中と、日光、足利学校について紹介する。図版上段の挿絵は、東照宮の中心社殿から奥院(奥宮)を描く。なお、柳枝軒は巻末に、香取・鹿島・息栖の三社と筑波山を経由する参詣路を増補している。本文の翻刻は『益軒全集』7(国書刊行会、1973年)、貞享2年(1685)8月に記された稿本「東路記」は『新日本古典文学大系』98(岩波書店、1991年)参照。



14 日本行程一目玉銚 井原西鶴

元禄2年(1689)正月 4巻4冊

元禄文化における上方文芸を代表する西鶴が著した千島列島から九州にいたる日本国内の歌枕を紹介する名所案内記。下段に街道筋を図示し、その上段に宿駅・名所およびその地を詠む古歌を解説する。巻1に日光の「黒髪山」(男体山)が見える。その刊行年は、くしくも松尾芭蕉が日光を訪れた年にあたる。当図書館が所蔵する版本は、『家蔵日本地誌目録』(1927年)の編者高木利太の旧蔵書である。



17 めぐみのたひ路 豊島武経

享和2年(1802)年5月 2巻2冊

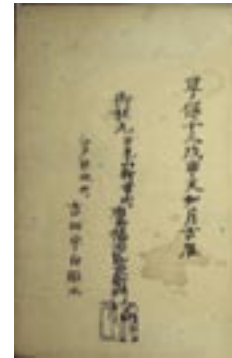
江戸城吹上御庭を管理する吹上奉行豊島左兵衛武経が幕府の許可をうけ、日光神領における朝鮮種人参御用作と東照宮祭礼の実見を果たした旅の紀行文。文化3年(1806)5月藤原清翰の序、享和3年成島司直(図版10参照)の跋を付す。昌平坂学問所内の史局(地誌の編纂係)、将軍家の紅葉山文庫、大阪の蔵書家浜和助を経て東京高等師範学校図書館の架蔵となった。



16 日光拝覧文章 柳塘山人 享和元年(1801)6月

乙竹文庫(乙竹岩造寄贈)本。手習の教科書として江戸上野麓下谷町花屋久治郎から出版された。本文は、日光に参詣した著者がその見聞を江戸の知人に知らせる書簡の体裁(いわゆる往来物)を取っている。その本文に先立ち、図版にあげた「日光強飯之図」,「日光名物品類」,「江戸より日光迄宿次行程」を挙げており、手習を通じて、日光の歴史や地理を学ぶことができる。日光参詣を取り上げた往来物には、文政7年(1824)正月出版の細川並輔『日光詣結構往来』もある。いずれも影印は『往来物大系』59(大空社、1993年)参照。





### 18 日光山名跡誌 <sup>につこうさんめいせきし</sup> 鷹橋義武 <sup>たかはしよしたけ</sup> 享保 13 年 (1728) 2 月 (初版) 2 月・天保 11 年 (1840) 2 月 (第 4 版) 各 1 冊

日光御幸町の商人鷹橋治郎左衛門義武が 8 代将軍吉宗の社参 2 か月前に出版した案内記。日光で出版された案内記としてははじめてのものである。画は江戸神田鍛冶町の表具師・彫金師菊岡沾涼、初版の彫工は鉄炮町の吉田宇白で、いずれも江戸の住人である。「参詣の男婦」<sup>かんたかじちようひやうぐ</sup>、すなわち庶民が東照宮を参拝する際、拝殿では明治期の神仏分離以前に 3 つかけられていた鰐口の下から拝することなど、参詣の心得も説かれる。『日光山名跡誌』は後に隣町石屋町の万屋遠藤喜六が明和元年 (1764) 8 月・文政 5 年 (1822) 8 月に、同町の大島久兵衛が天保 11 年 2 月、明治 23 年 (1890) 5 月に重版しており、大名・公家から町人・百姓にいたるまで広く流布することとなった。図版は東照宮絵図 (初版)、および初版・第 4 版の奥書。



### 19 日光山諸所案内手引草 <sup>につこうさんしよしょあんないてびきぐさ</sup> 天保 11 年 (1840) 2 月 (第 3 版)

『日光山名跡誌』(図版 18) から要点を抄出した略案内記。同書の略案内記には、鷹橋義武自身が享保 13 年 2 月に出版した『日光山道しるべ』<sup>につこうさんみち</sup>があり、鷹橋の版權を継いだ万屋遠藤喜六もまた明和元年 10 月にこれを重版した。遠藤は、より小型の折本形式で寛政 2 年 (1790) 2 月に『日光山諸所案内手引草』を出版した。以後、文政 5 年 11 月、ついで版權を大島久兵衛に移し天保 11 年 2 月に重版された。右の図版は東照宮の部分。この天保の第 3 版では彩色が加えられた。

日光ではこのほか、元禄年間 (1688 ~ 1704) より幕末まではついで鉢石町の御絵図所植山弥平治 (弥平) 家から、『日光御山の絵図』と題する絵図も出版され、いずれも土産物とされた。





### III 将軍家慶の日光社参

一二代将軍徳川家慶は、天保一四年（一八四三）四月に六七年ぶりとなる日光社参（「日光御参詣」）を実施する。これは、幕政改革を推進する老中水野忠邦が幕府の威光を示すべく企画し、質素儉約が叫ばれる最中にもかかわらず、総勢一四、五万人にあまる武家が日光山へと行進した。

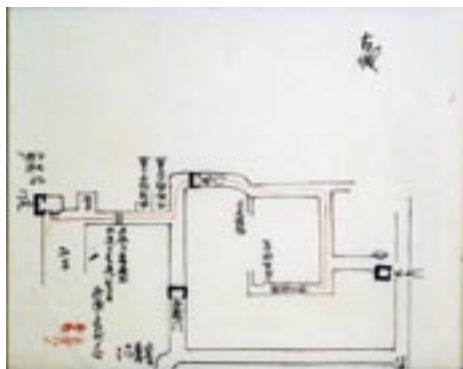
社参では、将軍が統治者として軍役を課し、その権力を発動する。武家だけでなく、町人・百姓も社参役を負った。町や村は対応を迫られる。その一方で、将軍の行列を眺め、また日光山の祭礼を見物する姿もあつた。

武家、公家、そして町人・百姓は、その前年から通達された数多の触書、警固（警備）の計画のみならず、現場で起きた予想外のできごとなどを、公私さまざまなかたちで記録した。そのなかには絵画・絵図も見受けられる。水野の意図どおり、場所場所で放たれた幕府の威光が燦然としたのである。

とはいえ、それは、幕府・将軍家にとっては最後のきらめきであった。水野は同年閏九月に老中を罷免され、失脚し、時代は確実に維新へと歩み始める。



日光への行列での老中  
水野忠邦（越前守）（巻6）。



4月14日、宿城古河城内で  
尾島主殿頭が進む道順（巻14）。



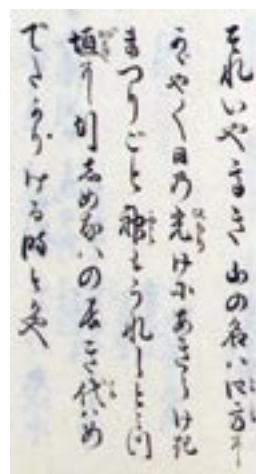
尾島主殿頭が勤める社参役  
たる軍役の書上（巻14）。

#### 20 日光御参詣記 尾島主殿頭

弘化2年(1845) 14巻14冊・目録1冊

著者は社参に供奉した旗本で、将軍の警固役である新番頭格の御小納戸頭取。天保13年(1842)2月以降の武家に対する通達や、将軍が泊まる宿城を含む社参中の諸儀礼の次第、還御後に社参の成功を祝う祝儀、そして翌々弘化2年まで続く褒賞などを記録する。全巻は、武家への通達集である「殿中御沙汰・御書付留」（巻1～3）、行列・祭礼の進行を書き留める「御次第書留」（巻4・5）、日光道中・宿城・日光山内の諸儀礼の次第書である「御道中・三城并日光御旅館等留」（巻6～8）、江戸城内での用向きを記す「奥向之儀等留」（巻9～11）、役職にかかわる「御小納戸頭取御用取扱方伺書付留」（巻12）・「右同断諸向掛合并御達書留」（巻13）、尾島自身の覚書である「自留」（巻14）から構成される。

江戸還御後の江戸城本丸での祝儀では、供奉者に能の拝見が許されたが、その初日5月2日の「開口」（図版左）も書き留められている。



「それ、いや高き山の名ハ、四方に  
かゞやく日の光、けにあきらけき  
まつりごと、神もうれしとみつ  
垣に、引しめなハの長き代ハ、め  
でたかりける時とかや」

5月2日、江戸城における  
能の開口（巻5）。



「日光御参詣警固絵図」の世界

図版21～38の絵図一八舗は、画風や筆跡、装幀が同一である。社参する家慶を警固するために、百人組（鉄炮百人組）の配置・進行の計画を描いた一連の絵図群である。

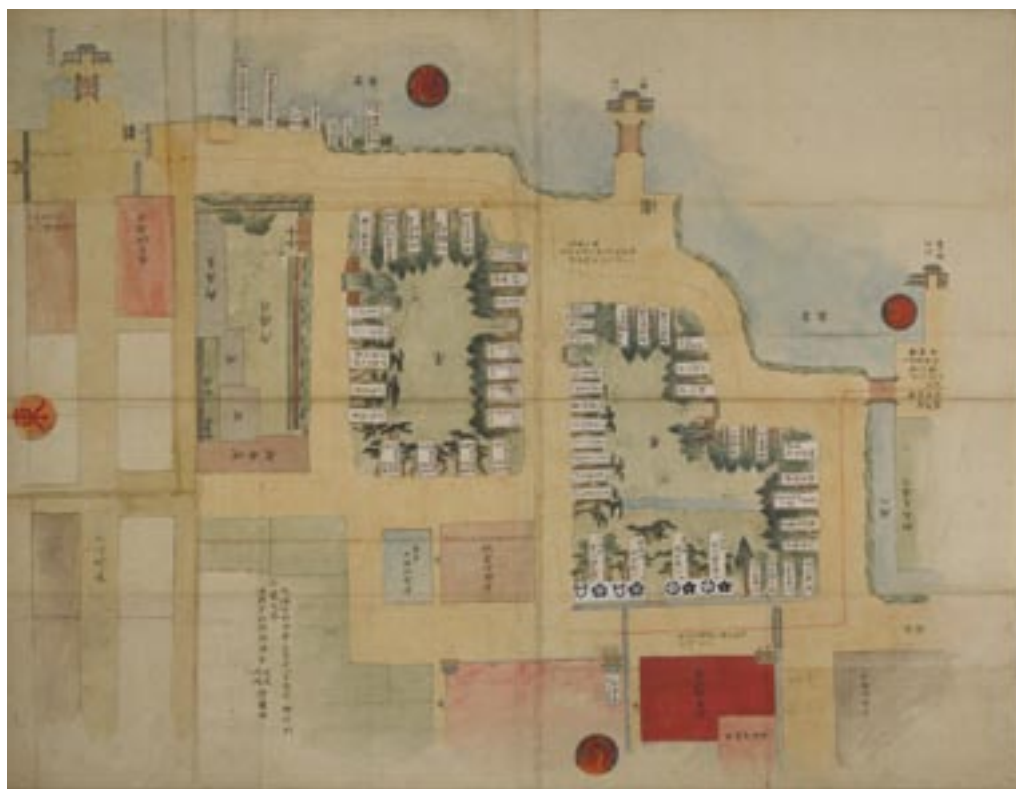
百人組には、甲賀・根来・大久保（伊賀）・青山（二十五騎）の四組があり、各組に一名の組頭（当時はそれぞれ諏訪備前守、斎藤伊賀守、土岐下野守、花房志摩守）、二〇～二五名の与力、一〇〇名の同心が所属し、平時は江戸城大手三之門に詰めた。將軍御成（外出）時の現地での警固も任務とした。

図版24の端裏書に「全廿枚」とある。前身校の蔵書目録・受入簿と照合すると、古河城および江戸での御目見場（將軍に謁見する地点）・御供開場（供奉者の解散地点）の絵図二舗を惜しくも散佚したことになる。



あしなみじょうらん の せつひかえじょ え ず めん  
21 足並上覧之節 控所絵図面 天保14年(1843)3月

供奉者は、社参の前に江戸城内で足並稽古（行進の予行練習）を行った。3月2日には將軍家慶が上覧（見物）した。その百人組などが江戸城竹橋門内で控所とする場所や道順、集合・解散地点を示す。



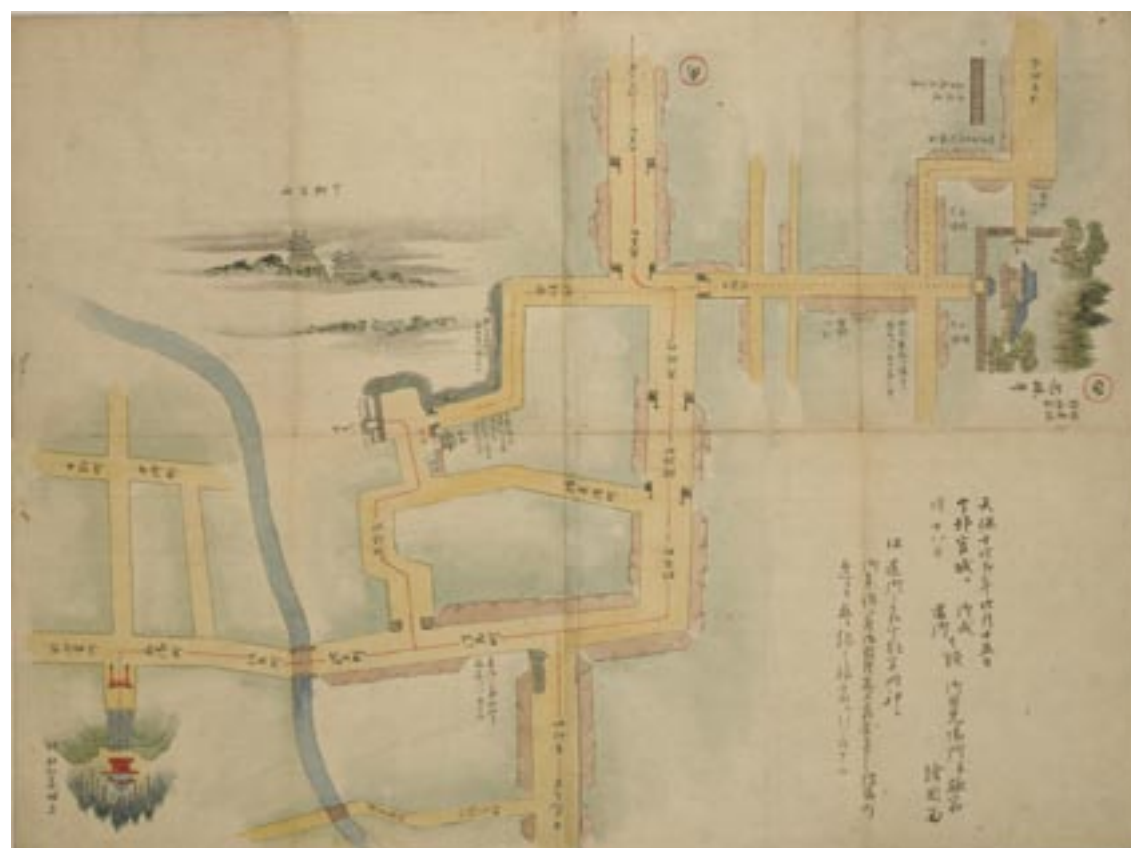
につこうごさんけいあしなみぎょうれつじょうらん の せつおもかたひかえじょたてば ひらきばえ ず  
22 日光御参詣足並御行列上覧之節御供方控所建場・開場絵図 天保14年(1843)3月

3月18日の足並稽古でも上覧があった。大名・高家も加わり、2日より大規模である。供奉者の控所の建場（定位置）と開場（解散地点）とともに、朱の直線・点線で鉄炮百人組の進む道も示す。

江戸城内での足並上覧

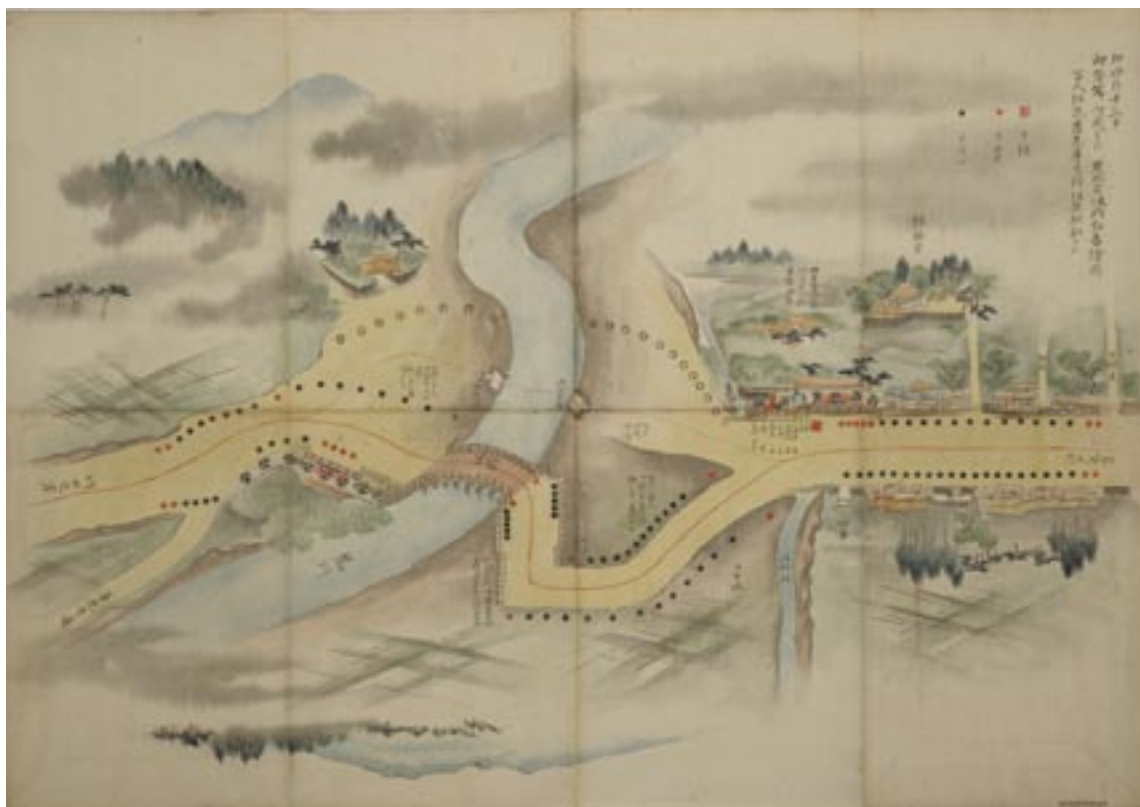


につこうごさんけいいわつきおめみえ おともひらきばしょえず  
23 日光御参詣岩槻御目見・御供開場所絵図 天保 14 年 (1843) 4 月



につこうごさんけいうつのみやおめみえ おともひらきばしょえず  
24 日光御参詣宇都宮御目見・御供開場所絵図 天保 14 年 (1843) 4 月

將軍が日光への御成とおなりと江戸への還御時に宿城(宿泊する城)となる岩槻城(埼玉県さいたま市)および宇都宮城(栃木県宇都宮市)の警固絵図。百人組の御供開, 組頭の御目見場所, 後者では甲賀組組頭の旅宿光琳寺こうりんじを示す。



おなりのせついわぶち かわぐちかりばしきんばん え ず  
25 御成之節岩渕・川口仮橋勤番絵図 天保 14 年 (1843) 4 月



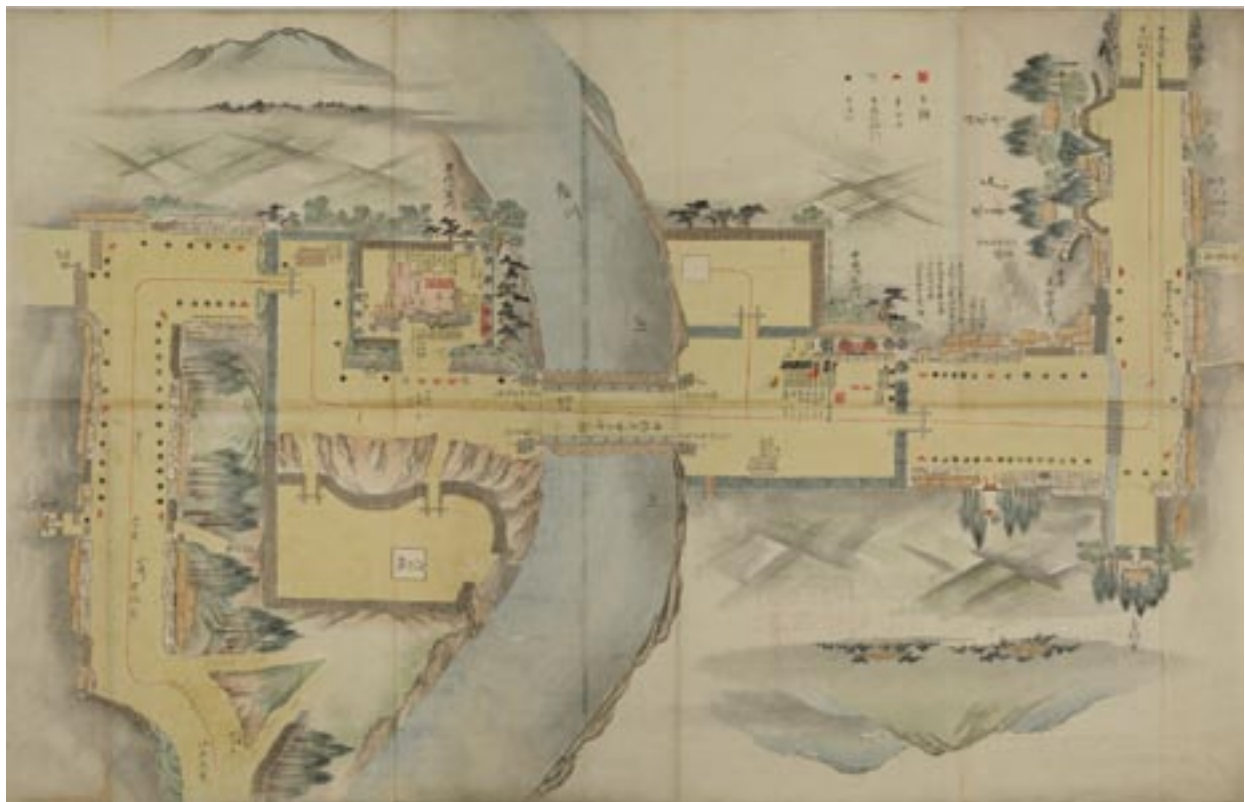
かんぎょのせついわぶち かわぐちかりばしきんばん え ず  
26 還御之節岩渕・川口仮橋勤番絵図 天保 14 年 (1843) 4 月

日光社参の行列は、日光御成道の岩淵宿（岩渕宿とも表記、東京都北区）と川口宿（埼玉県川口市）との間で荒川を渡る。ここは橋のない渡船場であったが、社参期間中のみ橋が仮設された。橋脚のある仮橋が描かれている。図版 25 によると、将軍の御成時には船も用いられた。





おなりのせつぼうせんふなばしきんばん え ず  
27 御成之節房川船橋勤番絵図 天保 14 年 (1843) 4 月



かんぎょのせつぼうせんふなばしきんばん え ず  
28 還御之節房川船橋勤番絵図 天保 14 年 (1843) 4 月

日光道中栗橋宿 (埼玉県北葛飾郡栗橋町) と中田宿 (茨城県古河市) の間には、巨大河川利根川<sup>とねがわ</sup>が流れる。こ  
こは房川渡 (房川渡中田関所) と呼ばれ、荒川と同じように橋は架けられず、番所が置かれて不審者の江戸への  
出入りが監視された。将軍が通行する際には船橋<sup>しゅうりん</sup>がかけられた。船橋は、普段は舟運 (河川交通) で用いられる  
高瀬船<sup>たかせぶね</sup>を綱で連結して両岸の大杭にくくりつけ、その上に橋を渡したもの。家慶の日光社参時には、長さ 151  
間 (約 272 メートル)、つながれた高瀬船は 50 艘であったと伝えられる。そのような<sup>かわらばん</sup>は、瓦版にも描かれた。





おなりのせつきざわむらおかため え ず  
29 御成之節喜沢村御固絵図 天保 14 年 (1843) 4 月



かんぎよのせつきざわむらおかため え ず  
30 還御之節喜沢村御固絵図 天保 14 年 (1843) 4 月

喜沢村 (栃木県小山市) は、将軍の往復する日光道中と、渋滞をさけるために供奉者の一部が通行する脇往還 (壬生海道 (壬生通) の分岐点。御成時は甲賀組、還御時は大久保組が警固を担当した。



うつのみやよりいちのやまきりどお やまみちしゅご え ず  
31 宇都宮<sup>ろ</sup>丸之山伐透し山道守護絵図 天保 14 年 (1843) 4 月



うつのみやよりにのやまきりどお やまみちしゅご え ず  
32 宇都宮<sup>ろ</sup>式之山伐透し山道守護絵図 天保 14 年 (1843) 4 月

図版 31 ～ 34 は、宇都宮城下 (栃木県宇都宮市) から日光山へ向かう日光道中で、百人組が通行、警固する台地上を通る古道を図示する。その出入り口には木製の道標が立てられている。31 は金井村 (金井<sup>ちようば</sup>丁場) から下<sup>しも</sup>徳次郎<sup>とくじら</sup>宿の間、32 は上<sup>かみ</sup>徳次郎宿 (いずれも宇都宮市) の景観が描かれる。





うつのみやよりさんのやまきりどお やまみちしゅご え ず  
33 宇都宮方三之山伐透し山道守護絵図 天保 14 年 (1843) 4 月



うつのみやよりよんのやまきりどお やまみちしゅご え ず  
34 宇都宮方四之山伐透し山道守護絵図 天保 14 年 (1843) 4 月

図版 33 は<sup>のぐち</sup>野口村, 34 は<sup>しちり</sup>七里村 (いずれも栃木県日光市) の景観を描く。「日光御参詣警固絵図」における道中の景観には, 将軍や供奉者の休憩所・昼休所, 地域の生活環境も描かれている。七里村には, 板塀で囲まれた将軍の御小用所 (小便所) が「御小休<sup>ごしょうきゅう</sup>」と記されている。ここは百姓上山丹左衛門家が所持する「人参畑<sup>にんじんばた</sup>」で, 享保年間 (1716 ~ 36) から始まる朝鮮種人参<sup>ちようせんしゆ</sup>を栽培する。七里村の東端 (図版左端) には<sup>おたていわ</sup>霊石尾立岩が描かれるが, その下部には「ワサビ沢」の地名がある。ワサビはこの沢が流れ込む野口村の特産物であった。



4月13日に江戸を出立した将軍家慶は16日に日光山へ到着し、以後18日まで本坊に滞在する。17日には東照宮本殿における神事に出仕した後、御物見(棧敷)で神輿渡御を見物、その終了後に東照宮・大猷院を順に参詣する。その後、山内の滝尾・新宮(二荒山神社本社)・相輪櫓・常行堂・法華堂、さらに寂光寺を回る。夜には強飯式も執り行われる。翌18日には上鉢石町から松原町まで徒歩で歩き、漆器・蠟石細工・植木など代金20両あまりの土産物を購入する。

この間も百人組の警固は続く。図版35は17日、東照宮・大猷院参詣時の東照宮五重塔周辺での警固、36は16日の到着時に山内の入口で、将軍も徒歩で渡る神橋の前での警固を描く。将軍を出迎える役人ごとの御目見場所が示されている。

35 日光御山中五重塔下勤番絵図  
天保14年(1843)4月

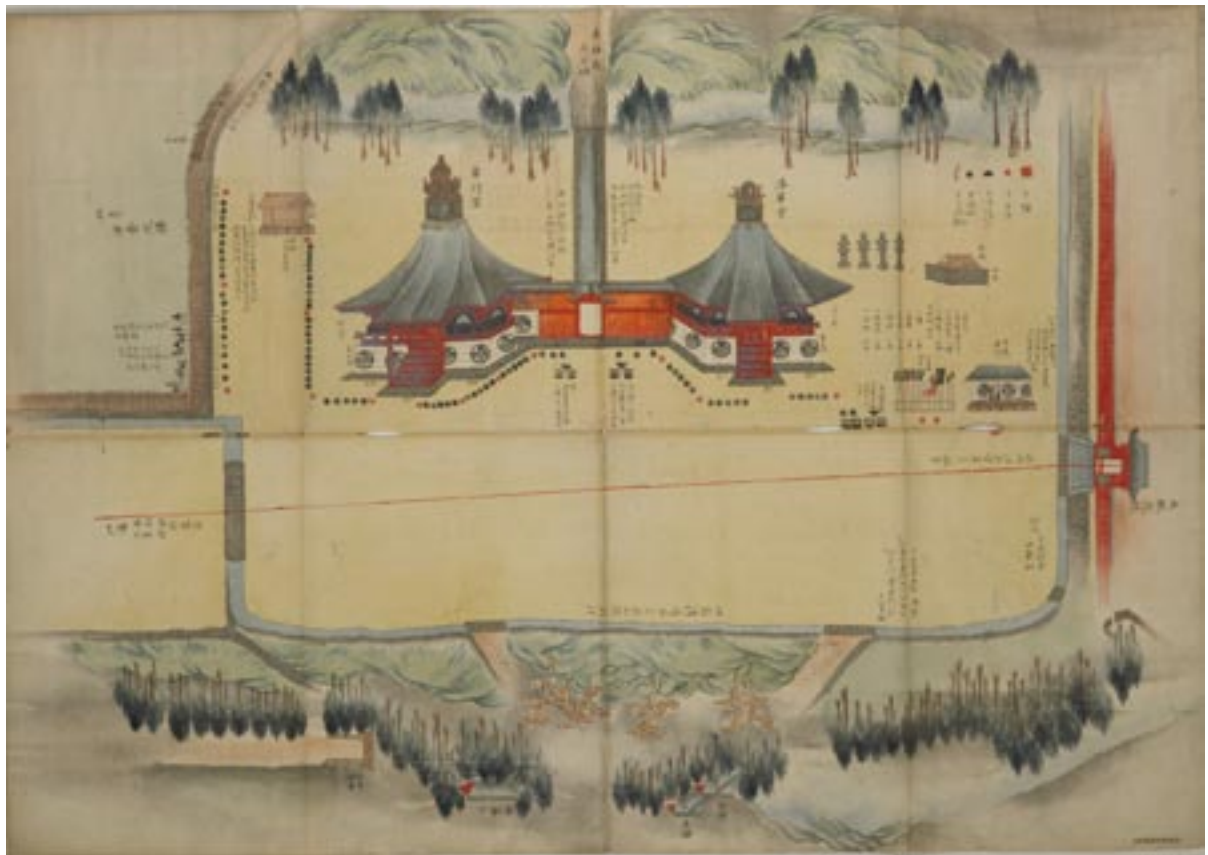


36 日光神橋勤番絵図  
天保14年(1843)4月





につこうでさんちゅうたいしびょうきんぱんえず  
**37 日光御山中大師廟勤番絵図** 天保 14 年 (1843) 4 月



につこうでさんちゅうじょうぎようどう ほっけどうきんぱんえず  
**38 日光御山中常行堂・法華堂勤番絵図** 天保 14 年 (1843) 4 月

図版 37 は慈眼大師天海の廟所である慈眼堂 (大師堂) 境内, 38 はその坂下に位置する常行堂・法華堂周辺の警固絵図。家慶が 17 日に大猷院を参詣した際の警固を示すものであろう。



39 日光鉢石町入口小屋場絵図

当図書館にはさまざまな将軍警固の絵図が所蔵されている。日光社参の警固絵図については、これまでに紹介した将軍家慶のときの18舗以外にも2舗が確認されている。本絵図は、社参において将軍の供奉者が鉢石宿(町)入口に到着した直後に集結する場所を示したものであるが、年代は未詳。御成道とあるのは日光道中で、図版上部に松原町の端にある大木戸が見え、その外側に仮設された小屋場(現東武日光駅付近)には供奉者の立ち位置を多数の付箋で示す。なお、東京高等師範学校図書館での受入以来、下野北東部を領有する那須衆が守る小屋場への通路を示す書入を見誤り「日光那須衆小屋路ノ図」と題されてきたが、本図録では表題を改めた。



40 日光東町

簡素な平面図に朱墨で道順・警固箇所などを書き入れた簡略な警固絵図は当図書館所蔵絵図中に少なくない。本絵図もその一つで、鉢石宿に相当する日光東町を描く社参の警固絵図である。宿の入口に「迎札此所」、下鉢石町の大横町入口には「明番組同勢集場、下宿二居残候御番衆出向場」の書入がある。



41 日光山志 植田孟縉

天保8年(1837)正月 5巻5冊

著者が日光山の史跡・故事・博物を絵入りの10巻本にまとめ、文政7年(1824)11月に湯島聖堂に献上した官本をもとに再編された5巻本で、江戸の書肆和泉屋庄次郎らにより出版された。植田は、幕府八王子千人同心の一人で、防火をになう日光勤番にも派遣された。序は鳥取藩支藩若桜藩前藩主池田定常(松平冠山)、幕府内史局直事屋代弘賢、挿絵は渡辺華山・葛飾北斎・谷文晁・椿椿山らによる。将軍家慶が、石屋町樋屋富五郎・松原町三河屋善兵衛から購入した姫石楠木も載る(図版右上)。



42 日光山行記 久須美祐雋

天保9年(1838)

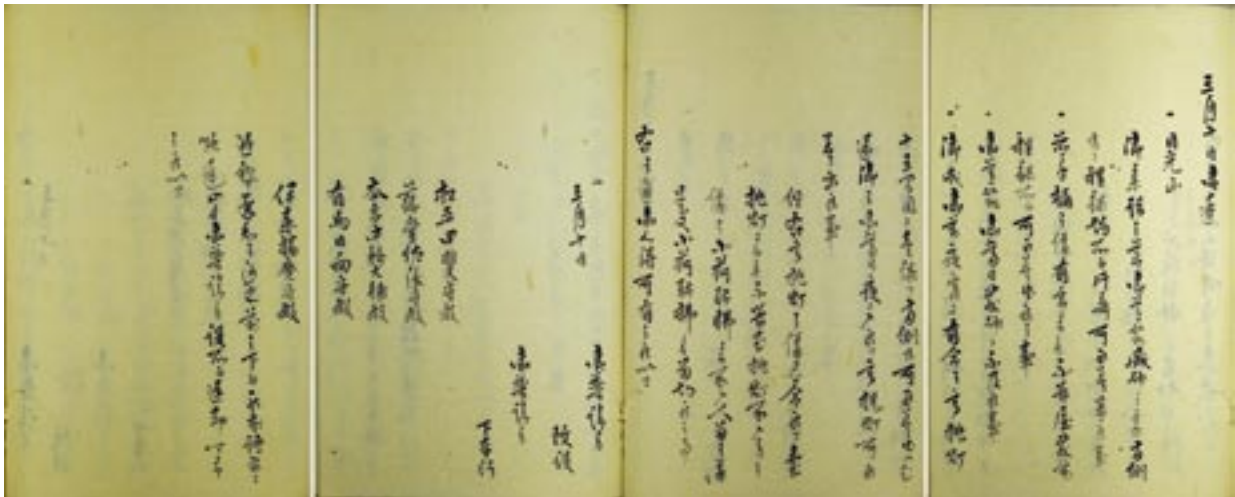
当図書館には、旗本久須美家歴代の自筆による記録・旧蔵書が所蔵されている。著者は天領佐渡で天保改革を断行した佐渡奉行として知られる。日光社参には供奉しなかったが、その5年前の4月に僚友西尾定省とともに日光山に参詣している。本史料は、その漢文による紀行文の自筆稿本で、挿絵もある。その一葉は、家慶も東照宮参詣後に足をのぼした寂光寺(寂光権現)である。



43 扈從九日志 林 訥 天保14年(1843)12月

著者は幕府儒者で、昌平坂学問所を率いる大学頭。林述斎の3男で、天保改革期の江戸町奉行鳥居耀蔵の兄。佐藤一斎・松崎慊堂に師事した。後に檀宇と名乗る。日光社参に際し家慶に供奉した著者は、その記録として13日から22日までの9日間を漢文により著し、自ら版行した。その古格豊かな文体は、林家9代当主にふさわしい。序は安積良斎。翻刻は『江戸』6(教文舎、1981年)参照。





につこうさんごさんけいのせつもりかわおやしきまえつうぎよ つきこころえかた おかみやしきまえてどうぜいば みぎりようおやしきづきつじばんしよ  
**44 日光山御参詣之節森川御屋敷前通御二付心得方、御上屋敷前御同勢場・右両御屋敷附辻番所**  
 おるすちゆうしよこころえかたうかがいならびにおたつし いしはらなおよし  
**御留守中諸心得方 伺 井 御達 石原直毅 天保 14 年 (1843)**

著者は三河岡崎藩主本多中務大輔忠民の家中で、通称は<sup>ただし</sup>糺。家中内外の各種事案の先例集「諸家例集」66 巻をまとめた。本史料はその巻 58。前年 11 月以降の日光社参にかんする達と伺書・答書を写す。図版にあげた幕府御普請方からの達では、將軍・幕府の威光を支えるべく、御参詣の道筋にあたる武家屋敷前で盛砂をし手桶を飾ること、御成前夜の宵からあり合わせの高提灯を 15 間（約 27 メートル）おきに 1 張ずつ差し出すよう命じられている。なお、本多忠民は社参中、<sup>いまいちじゆく はつしじゆく</sup>今市宿・鉢石宿間の古道口（栃木県日光市）の勤番を勤めた。

#### 45 天保令条 卷 坤



徳川御三家の一つである常陸水戸藩の天保 9 年 (1838) から同 15 年 (1844) 分の政務日誌の抄出で、貞勝なる人物が文久 3 年 (1863) 冬に写したもの。藩主徳川<sup>なりあき</sup>斉昭は、日光社参の際、水野忠邦の計画に反対しつつも供奉した。御三家は將軍の行列には加わらず、<sup>なかせんどう</sup>中山道を回って<sup>たてぼやしみち</sup>館林道を北上し、<sup>れいへいしみち</sup>例幣使道を通して今市宿に入り、さらに<sup>あいづみち</sup>会津道に出て大桑宿（栃木県日光市）から日光山に入った。その道順・旅館を記す箇所では、これを「御予参」と記す。斉昭は「水戸黄門<sup>きよう</sup>斉昭<sup>おんみち</sup>卿<sup>の</sup>日光御道之記」（別書名「日光山紀行」、茨城県立歴史館所蔵）を著し、また、「日光從駕<sup>じゅうが</sup>図巻」（財団法人水府明徳会所蔵）を描かせている。

#### 46 天保二たらの記



青木<sup>あおきた</sup>敬義<sup>かようし</sup> 天保 15 年 (1844) 3 月 2 巻 2 冊  
 青木貢一敬義による家慶社参の御用留。青木は文化～天保年間 (1804 ～ 44)、幕府代官支配の<sup>てつけ</sup>手付（実務下僚）。当図書館には、<sup>ひようじようしよ</sup>評定所による<sup>ろんしよちあらため</sup>論所地改（相論の現場検証）に従事したときの願書・覚書を書き留める一件記録の控や、在地支配の手引書である「<sup>けんちたい</sup>検地大意」「<sup>てきれい</sup>検地地例」などその自筆による記録約 20 点が所蔵されている。本史料の末尾には自筆で、「我家の子々孫々に至迄、永為<sup>わがや</sup>亀鑑<sup>ししそん</sup>、<sup>いたるまで</sup>追々<sup>ながきかんとして</sup>とどめおく<sup>なり</sup>に留置もの也」と記している。



# 筑波大学附属図書館所蔵の絵図

篠塚 富士男

当館では、平成一六年度に科学研究費補助金を得て古地図の高精細画像の作成と公開に着手して以来、現在までに三六〇点余りの古地図・絵図の高精細画像を作成し、ホームページで公開している。

古地図・絵図という言葉は一般によく使われているが、その定義は必ずしも明確ではなく、これらを研究対象とする学問分野によっても微妙な違いがある。当館では、古地図を「近代的測量ならびに印刷術普及以前に作成された地図」、絵図を「近世以前に作成された絵画的手法によつて地物を表現した地図」と定義するとともに、基本的には近世に作成された一枚ものの地図・絵図を対象に電子化してきたが、作業の進展にともない、冊子体になっている地図（地図帳形式のもの）の中の主要なものも電子化対象に加えている。

これらの高精細画像は、当館の電子化資料のページの中の「古地図」（図1）から、カテゴリ別とタイトル五十音順の二つの方法でアクセスできる。このうち、「カテゴリ別」では、当館の所蔵状況から、世界図・日本図・江戸図・城図等の一九のカテゴリを設定しており、たとえば今回の展示の中心となっている「日光御参詣警固絵図」群（本図録一八ページ参照）は「日光社参図・勤番図」から見る事ができる。

※本稿の図2・図5の「」内の記述はカテゴリを示している。



図1 古地図のページ

<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/pub/tree/kochizu.html>

これらの古地図・絵図の中には、たいへん貴重なものが数多く含まれている。その一部は平成一九年度の企画展「古地図の世界―世界図とその版木―」で展示したが、ほとんどが本学の前身校である東京高等師範学校ないしそれ以前の収蔵であり、当館収蔵に至る来歴は不明であるものが多い。しかし、「日光御参詣警固絵図」のように、一連のまとまりをもったコレクションとも呼ぶべき資料群もある（図2）ので、古地図・絵図を単体でとらえるのではなく、文献史料を含めた複合的な調査をさらに進める必要があるが、こうした調査の過程で新たな知見を得られる可能性も高いと思われる。



図2 下総佐倉城之図（城図）



それでは、当館で公開している古地図・絵図の中から特に「絵画的手法」が印象深い図を以下（図3・図5）に紹介するが、これらの図に限らず、古地図・絵図を細部まで拡大・確認することにより、新たな発見も得られる可能性も大いにある。ぜひご活用いただきたい。

「鹿伏兎重好圖」とあるが、当館では城図等の中に何点か「重好」の記載のある図を所蔵しており、資料群という観点からの検討が必要である。



富士山



浅間山

図3 富士見十三州輿地之全図 秋山永年図 天保14年(1842)跋〔国郡図〕

富士山を望むことができる13の国を描く。近世の絵図で山を描く場合は、浅間山のように側面形で表現するのが一般的であるが、例外として富士山は平面化された表現で描かれることがある。本図では、山頂から発する放射状の線によって富士山の大きさ・形を表すとともに、吉田口等の三方向からの登山道や女人堂・金名水・銀名水等の名所も描かれている。



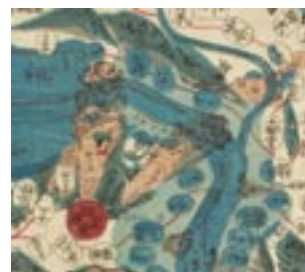
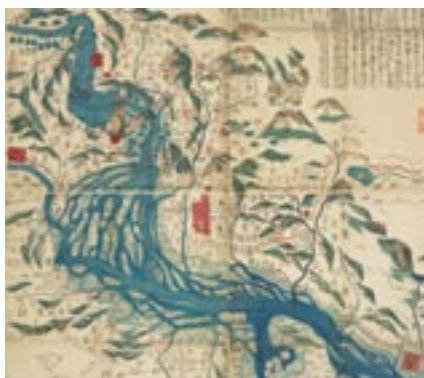
出島



オランダ舟, シャム舟, ナンキン舟など

図4 肥州長崎図 安永7年(1778)〔地方都市図〕

長崎の図には出島や外国船が描かれているが、特に船の描写は写実的であり、オランダ舟等の巨大な外国船に混じって、引舟、改舟、番舟、見送舟等がそれぞれの特徴を表した形で描かれている。出島と対岸をつなぐ入口の橋(出島橋)や表門(一ノ門)の描写も絵画的である。



虚空蔵山の崩壊

図5 弘化丁未夏四月十三日信州犀川崩激六郡漂蕩之図〔災害図〕

弘化4年3月24日(新暦:1847年5月8日)の善光寺地震の20日後(4月13日・新暦:5月27日)に発生した大洪水の被害を示す図。この大洪水は北信濃一帯に大きな被害をもたらしたが、その原因となった(犀川をせきとめた)虚空蔵山の崩壊の様子や水流に没した村々の名前などが克明に描かれている。なかでも洪水の範囲を示す川筋の描写は、この大災害の様子を視覚的に強く印象づける。

## 企 画

筑波大学大学院人文社会科学研究科歴史・人類学専攻

古家 信平（専攻長）

山澤 学（講師）

筑波大学附属図書館

植松 貞夫（館長）

木越 英夫（副館長・研究開発室長）

田中 成直（副館長）

附属図書館研究開発室

大塚 秀明（大学院人文社会科学研究科准教授）

## 編集・図版撮影協力

鈴木 実（大学院人文社会科学研究科院生）

## 附属図書館企画展ワーキング・グループ

篠塚 富士男（主査）

浅野 ゆう子

落合 厚子

徳田 聖子

中山 知士

福井 啓介

福島 裕子

峯岸 由美

村尾 真由子

## 特別講演会「日光 描かれたご威光」

平成 21 年 10 月 11 日 13:30 ～ 15:30

講師 山澤 学（大学院人文社会科学研究科講師）

## 電子展示 Web ページ

<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/exhibition>

---

平成 21 年度 筑波大学附属図書館特別展

## 日光 描かれたご威光

— 東照宮のまつりと将軍の社参 —

平成 21 年 10 月 5 日 発行

発行 筑波大学附属図書館 ©2009

〒 305-8577 茨城県つくば市天王台 1-1-1

TEL 029-853-2376

印刷 前田印刷株式会社

# 掲載図版一覧

図版 番号	史料表題〔著者・作成者〕	年代	点数	法量(cm)	請求記号	公開 画像
1	日光山修善雑記〔冷泉為景・伏原賢忠〕	慶安 2 (1649)	3冊	27.6× 19.5	ハ240- 70	有
2・41	日光山志〔植田孟縉〕	天保 8 (1837)	5冊	26.4× 18.0	ネ314-14	
3	日野大納言資勝卿記〔日野資勝〕	元和 2 (1616)	6冊	27.0× 19.5	ヨ216- 98	
		-寛永16(1639)				
4	東照大権現縁起	寛文 6 (1666) 写	1冊	27.5× 19.7	175.935-To72	
5	正徳日光例幣使	正徳 5 (1715)	1冊	26.7× 18.7	ヨ216-256	
6	日光山図絵		1舗	67.9×153.0	ヨ150-162	
7	日光御道中筋宿々里数		1冊	18.5× 8.9	ネ314- 15	
8	供奉御役附	享保12(1727)	1冊	9.4× 16.3	ヨ216-179	
9	安永中日光道中里数書		1冊	14.3× 21.3	ヨ219-182	
10	二荒山御供記〔成島和鼎〕	安永5(1776)	1冊	23.6× 16.4	ネ308- 89	有
		(天保15-1844写)				
11	日光山御祭礼絵図		1冊	21.9× 18.2	ハ240-102	
12	日光山詣の記〔藤原正従〕	寛政7(1795)	1冊	23.8× 16.8	ヨ216-175	
13	日光御社参図誌〔竹村立義〕	文政元(1818)	3冊	26.5× 18.8	ネ308- 88	
14	日本行程一目玉鈔〔井原西鶴〕	元禄 2 (1689)	4冊	25.8× 18.3	ネ310- 85	
15	日光名勝記〔貝原益軒〕	正徳 4 (1714)	1冊	16.6× 11.5	ネ306- 6	
16	日光拝覧文章〔柳塘山人〕	享和元(1801)	1冊	19.0× 13.5	ル185-836(乙)	
17	めくみのたひ路〔豊島武経〕	享和 2 (1802)	2冊	23.8× 17.0	ル170-102	
18	日光山名跡誌〔鷹橋義武〕	享保13(1728) 初版	1冊	18.6× 13.6	291.32-Ta33(図)	
		天保11(1840) 4 版	1冊	18.2× 12.5	291.02-T(体)	有
19	日光山諸所案内手引草	天保11(1840) 3 版	1冊	15.6× 6.7	291.32-N73(図)	
20	日光御参詣記〔尾島主殿頭〕	弘化 2 (1845)	15冊	14.7× 21.3	ヨ216-178	
					ヨ216-180	
21	足並上覧之節控所絵図面	天保14(1843)	1舗	31.5× 39.7	ヨ150-223	
22	日光御参詣足並御行列上覧之節御供方控所建 場・開場絵図	天保14(1843)	1舗	64.2× 83.8	ヨ150-167	
23	日光御参詣岩槻御目見・御供開場所絵図	天保14(1843)	1舗	39.9× 53.3	ヨ150-165	
24	日光御参詣宇都宮御目見・御供開場所絵図	天保14(1843)	1舗	40.0× 53.6	ヨ150-166	
25	御成之節岩渕・川口仮橋勤番絵図	天保14(1843)	1舗	52.1× 74.5	ヨ150-170	
26	還御之節岩渕・川口仮橋勤番絵図	天保14(1843)	1舗	52.1× 93.3	ヨ150-170	
27	御成之節房川船橋勤番絵図	天保14(1843)	1舗	52.2×112.1	ヨ150-161	有
28	還御之節房川船橋勤番絵図	天保14(1843)	1舗	52.2× 92.8	ヨ150-161	
29	御成之節喜沢村御固絵図	天保14(1843)	1舗	52.3× 74.2	ヨ150-168	
30	還御之節喜沢村御固絵図	天保14(1843)	1舗	52.2× 74.4	ヨ150-168	
31	宇都宮 㐂 老之山伐透し山道守護絵図	天保14(1843)	1舗	52.1× 74.4	ヨ150-171	
32	宇都宮 㐂 式之山伐透し山道守護絵図	天保14(1843)	1舗	52.1× 93.1	ヨ150-172	
33	宇都宮 㐂 三之山伐透し山道守護絵図	天保14(1843)	1舗	52.2×111.6	ヨ150-173	
34	宇都宮 㐂 四之山伐透し山道守護絵図	天保14(1843)	1舗	52.2× 93.8	ヨ150-174	
35	日光御山中五重塔下勤番絵図	天保14(1843)	1舗	52.1× 74.4	ヨ150-220	
36	日光神橋勤番絵図	天保14(1843)	1舗	52.2× 74.5	ヨ150-164	有
37	日光御山中大師廟勤番絵図	天保14(1843)	1舗	52.1× 93.2	ヨ150-163	
38	日光御山中常行堂・法華堂勤番絵図	天保14(1843)	1舗	52.0× 74.4	ヨ150-219	
39	日光鉢石町入口小屋場絵図(日光那須衆小屋路 ノ図)		1舗	53.0× 73.6	ヨ150-156	
40	日光東町		1舗	27.4× 39.3	ネ040-197	
42	日光山行記〔久須美祐雋〕	天保 9 (1838)	1冊	21.2× 13.5	ネ308- 92	
43	扈從九日誌〔林銑〕	天保14(1843)	1冊	19.0× 12.2	ヨ216-181	
44	日光山御参詣之節森川御屋敷前通御ニ付心得 方、御上屋敷前御同勢場・右両御屋敷附辻番 所御留守中諸心得方伺并御達〔石原直毅〕	天保14(1843)	1冊	23.5× 16.3	ヨ216-213-58	
45	天保令条 卷坤	文久 3 (1863) 写	1冊	25.7× 18.1	322.15-Sa13	有
46	天保二たらの記〔青木敬義〕	天保15(1844)	2冊	23.2× 16.5	ヨ216-177	

※史料はすべて筑波大学附属図書館所蔵。史料表題は外題および本図録で付した仮表題により示す。

請求記号欄のうち、(乙)は中央図書館の和装古書(乙竹文庫)、(体)は体芸図書館の和装古書、(図)は図書館情報学図書館の和装古書、とくに注記のないものは中央図書館の和装古書を示す。

当図書館ウェブページ上で画像が公開されているものについては、公開画像欄に「有」と示した(平成21年9月現在)。

